

COLUMN

鎌倉の猫事情 第四十四話

なんでも、熊があちこちに出没してるそう。

子熊が捕獲されているのをTVの画面で見ました。生きているのか死んでいるのか、ぐったりとして目を閉じていました。思わずグーニー君が捕らえられた姿を目に浮かべました。グーニー君、熊には似てないと思うのですが、狸に似てるとよく言われますし、背を丸めて歯を剥き出して唸る様子は、おどろした狸よりずっと野蛮です。だから、心配です。捕獲されないかと先日、お店に入り込んでしまい、すぐ追い払ったのですが、不審に思ったお客さまが保健所に連絡したらしく、翌日役所の人二人来たんです。

「ごめんなさい、もうあんなことさせませんから・・・」と謝って帰ってもらいました。グーニー君にも今度お店に入ったら保健所の人を連れに来るからね、とよく言ってきかせたところ。驚かせたお客さま、本当にごめんなさい。さて、山でお腹を空かせている熊に比べて、子猫たちは、本当に幸せなことです。6匹の子猫たちはもうずではっきりとした性格が見え始めました。好奇心が強く、箱の中から一番先に頭を出した子はいつどこへ行くのかとにかく目が離せません。小さいせに大きな人間を威嚇しようと うぶ毛を逆立たせ、ふうーと唸って横っ飛びをしてみせる戦闘的な子・・・グーニーそっくり、人の足音が聞こえると布団に潜り込む人見知りの子。時々壁に手をかけてぼんやりする思索するタイプ。匹それぞれです。とにかく兄弟は本当に仲良しで、おとさんよりおかあさんより、兄弟猫が好きなんです。匹は必ず固まってまあるくなって眠ります。兄弟の下敷きになっても、寝相の悪い子に顔を踏まれても、やっぱり一緒に眠ります。1ヶ月を過ぎる頃、子猫はうちをし始めました。小さなころした黒いうちを見かけるようになったら、子猫を匹ずつ砂の箱へ連れていって両手を持って砂を、掻く動作をしてやります。するとじっとなにか考えながら自分で砂を掻く仕草を始めます。それだけでほとんどの子猫は自分でトイレができるようになります。そうなるそろそろ里親を見つけなければなりません。

大きい子から順番です。楽しかった日々ももう少し・・・

ゴマ団子みたいになった白いお腹の蚤を匹順番にとってやった事や、自分でじゃれていたカーテンの紐が首にくるくる巻きになって目を白黒させていたのを見つけてびっくりしたこととか・・・

色んなことが思い出されて心が乱れます。 to be continued



静かな

Silence

「なにか言った？ いや、なにも言わない。ただ、窓の外には落ち葉がはらはらと舞っているだけ。誰もいるはずがないのに、誰かがなにかをつぶやいているように聞こえる時がある。そんな静かな夜。」

「しんとして、この家は本当に静かで、その静けさでうさぐさいのよ。特に夜はね」竹やぶに囲まれた山の中の家。大きな窓の前には季節ごとに花々が美しく咲く庭がある。秋の色に染まった庭を見つめて女は言った。

風の強い晩はそれは怖いよ。だって私は、いつもここに一人でのいるのだから。でも 風より静けさの方がもっと騒々しいのよ。だって、本当になんの音もないほど静かだと、色々なことが聞こえてくるの。そうね、私の体の中から・・・それに、そこやこの、色んなものや、とにかくなにやらみんなが、いっせいに叫びだすの。それくらい静かだってことよ。暗闇も同じ、あまりに光がなくて真っ暗な夜にはね、色んなものが見えてくるのよ。それが大変・・・」

船で海へ出て何の風もなく、油をひいたように静かで波のない日。なにもかもが止まってしまったような時間。そんな時に、静かに海を見つめて、じっとなにかを聞こえよう耳を傾けると、不思議になにかが、聞こえてくることもある。

漁師の口癖は、「魚のことは海に聞いてみなってことよ」だった。こんな静かな海に耳を傾けると初めは少し、そのうざざざと色んなざざめきが聞こえだす。そしてまるで海の底さえ、目に映るような気がしてくる。海の中にはゆったりとした流れがあり、砂がさらさらど波打って、小さな魚の群れや、大きな魚、そしてもっと大きな魚がまるで音楽に乗って泳ぎ回っているみたい。

・・・そんな風に感じた事がある。耳には聞こえない音・・・目には見えない風景・・・

それは、本当にあるのかな？ 静かな世界は、どこにあるの？

おにいさんが息を引き取る前に言った事。

「なんか・・・歓声が聞こえる・・・」

そしてまもなく、静かに息を引き取った。

おにいさんはきっと、その歓声の中へ

入っていったのだろう

おにいさんありがとう

今度また、そちらで会いましょうね・・・

